

歯学部長挨拶 鶴見大学歯学部は飛翔します

歯学部長 瀬戸皖一

鶴見大学歯学部は新しい歯学を目指して爽やかな飛翔をしています。いま日本の歯科医学は百年の歴史のなかで大きく転換するときを迎えています。明治 39 年に医学と歯学が同時にスタートしたときは日本人の寿命はほぼ 50 年、それがいまは人生 80 年になり、日本の生命医学は国民皆保険に支えられて世界一になり、究極の到達点に達しつつあります。しかし人々が本当に幸せに長生きしているかという必ずしもそうではありません。歳をとるに従ってだんだん人間に与えられている機能が失われていき不自由な生活になってくるのです。特にものを食べる、話をするなどの口の機能は社会の中で人間らしく生きるうえで一番大切な働きです。長寿と少子化が進んでいる中で人々の文化と生活を直接支えている口の機能を、総合的に維持し、豊かな生活を作り出す大きな仕事を歯科医師は担っています。歯科医師の仕事はむし歯を治すだけではありません。

歯科医学は医学とならんで医療を共有しており、高齢社会における機能回復医学の要(かなめ)として蘇ってきています。歯科医学は勿論医学をベースとしており、それに工学的要素が加わり、それらの基礎学術に支えられた臨床科学です。国民に最も身近な、そしてわかりやすい医療を提供するのが歯科医師の仕事です。

鶴見大学歯学部は国民の皆様のニーズを探索し、新しい歯科医療コンセプトを作りながら良質な歯科医師を世に送り出そうと決意を新たにしております。もとより歯科医学は医療科学の一分野ですから、科学者としての教育が基本です。そのためには豊かな人間性を持つ良識ある社会人としての教養教育(liberal arts)を重視します。そして基礎ならびに臨床にわたる医学教育(basic medical science)を栄養源として最新の歯科医療技術を自然に身につけた、思いやりのある歯科医師の育成に努めております。

附属病院では斯界をリードする高度歯科医療が展開され、その中でこそ充実した卒前の臨床実習、卒後臨床研修が行われるのです。病院で明日の歯科医療を創造する先進的な医療が行われるためには、それらを支える基礎科学の研究陣が充実していることが不可欠です。鶴見大学における基礎研究は臨床歯科医学の発展を支えるばかりでなく、多くの専門的な叡智を結集して、他の科学分野へ発信することを目標としています。

鶴見大学歯学部は医学と歯科医学の歴史的転換点に立って、新しい歯学教育のあり方を模索しているところです。精緻な技術教育というわが国が誇る伝統を活かしつつ、自然科学者としての洞察力、また医療人としての思いやり、また社会人としての先見性に優れた歯科医師を育成したいと考えて改革を断行しています。以下に鶴見大学歯学部の現状を簡単にご紹介いたします。

○ 沿革・環境

鶴見大学歯学部は昭和 45 年(1970)4 月に、女子学生のみの特徴ある歯学部として、曹洞宗大本山總持寺を母体とする總持学園の一員として横浜市鶴見区に誕生しました。もともと総持学

園は創立 63 年の鶴見女子大学を基盤としており、それもあって歯学部も女子教育から始まりました。しかし 3 年後には歯学部のみ男女共学となり、やがて他の学部も漸次男女共学となり、本年から附属中学および高校も男女共学になります。

歯学部は本年で第 32 回生が卒業し、卒業生総数は 4460 名を越え、いずれも全国各地で活躍しており、臨床の腕がいい歯科医師との定評を頂戴しています。

鶴見大学は JR 京浜東北線鶴見駅からゆっくり歩いて5分の交通至便の地にあります。それでいて大本山總持寺の広大な境内の一隅に位置しているだけに、緑に包まれた閑静なたたずまいの中にあります。学生や職員はこの緑豊かで静かな環境を満喫しつつ学業を楽しんでいます。総持学園には日本文学科、英語英米文学科、文化財学科、ドキュメンテーション学科からなる文学部、歯科衛生科、保育科からなる短期大学部ならびに同附属三松幼稚園も同じキャンパス内にあり、これら他学部の学生との交流も盛んに行われています。特に殆どのクラブ活動は学部の枠を越えて活動しております。

平成 16 年には総持学園 80 周年を記念して大学記念館が建造され、歯学部の環境が著しく改善されました。特に全面ガラス張りの明るい食堂は好評で、参道にならぶ大樹の緑を眺めつつ、学生の学部間交流、あるいは教職員との交流が盛んに行われるようになりました。また 500 人収容の大ホールは一般社会との様々な文化交流が行われる場になっています。本年 7 月には日本学術会議の第二部(生命科学)部会が行われ、社会に向けたシンポジウムが開かれます。私立大学が、それも歯学部が主催するのは初めてです。

○ 教育改革

「歯科医学は医学の一専門分科(一元論)」と「医学の専門分科ではなく、医学と同等で、一つの独立した自然科学(二元論)」との考えが世界の近代歯科医学の歴史の中で大変議論になっていました。わが国では約百年前歯科医療発足当初から二元論に傾き、特に戦後は徹底した二元論の教育システムにより世界が眼を見張る大発展をとげて参りました。しかし最近になって歯科医学、歯科医療はあまりにも医学医療から分離独立したために、いろいろな弊害が現れてきました。この点に注目して鶴見大学歯学部は新時代の歯科医師像を描いて、教育理念とカリキュラムを少しずつ変更しつつあります。

まず入学後すこし落ち着いたところで 2 泊3日の短期集中研修を行い、教職員や同学年の友人と「同じ釜のメシを食う」ことから始まります。一年目は医学歯学に向けた理科教育、英語、ドイツ語などの実践語学の基礎、倫理哲学、医療人としての基本を習う医療人間科学、同実習などの教養教育をがっちりを行い、やがて解剖学、口腔生理学、口腔生化学、口腔細菌学、歯科理工学など医学、歯科医学の基礎教育に移行していきます。この 1~2 学年の学習はとても大切です。この間は自ら「患者さんのために自身の全てを投げ出して奉仕できる人物を目指す」かどうかよく確かめる期間でもあります。歯科医学はかなり特殊な分野ですので、相性というか向き不向きがあると思います。どうしてもノリが悪いと感じる学生は潔く方向転換されることを勧めています。貴重な青春時代を嫌々ながら身が入らない勉強をするのは本人にとっても社会にとっても大きな損失

です。

3～4 年目には口腔病理学実習、歯科薬理学など臨床に直結する基礎歯科医学、あるいは社会歯科学を学習し、やがて歯科保存学、歯科補綴学、口腔外科学など臨床科目がびっしり並ぶようになります。基礎的な実習を念入りに行うのも歯学部の特徴です。この間に学ぶ基礎歯科医学は勿論医学の基礎に共通する部分が多く含まれており、内科学、外科学、眼科学、耳鼻咽喉科学、皮膚科学など歯科医療の基礎となる臨床医学と併せて basic medical science として極めて重視しています。

5 年次からは臨床実習に入りますが、この前に全国共通で行われる共用試験をパスしていなければなりません。CBT と呼ばれるコンピュータを用いた学力試験と OSCE と称する実技試験です。鶴見大学歯学部は臨床実習が診療参加型で行われていることで有名ですが、それにしても侵襲性の高い歯科医療で完全に診療を行う形の臨床実習に同意して下さる患者さんが少ないのは当然であり、これは歯学教育上の大問題です。これに関しては全国の大学に呼びかけて、もう少し医学部の臨床実習と整合させる必要がありそうです。

鶴見大学歯学部は医歯二元論の教育システムを発展させつつ、改革を進めております。それは手先の実技教育のイメージから脱却して、基礎科学、基礎ならびに臨床医学教育を通して、自然科学者の眼と頭脳、医学者としての精密な知識と思いやりを身につけた上で、歯科技術を習得する方向です。臨床教育においては problem based learning (PBL) に徹するのが世界の潮流でもあります。

○ 臨床改革

昨年クリスマスには附属病院への来院患者数がついに 1000 名を越えたとの報告が病院長からいただきました。昨年 12 月に入ってから一日 900 名台が続いていたそうです。当附属病院では安全安心医療を励行し、また歯学部としては唯一開放型病院として全国の臨床家から絶大な信頼を頂戴し、紹介率は 60% 台を維持しております。昨年病院の機能評価歯科医療情報推進機構に依頼し、全国歯学部病院に先駆けて認定を取得し、堅実な道を歩んでおります。

附属病院は患者さんのニーズに応えつつ、新しい歯科医療を創造しております。眼科を導入しドライマウス外来とドライアイ治療が見事にドッキングし、内科と歯科でいびき外来、内科と全学部が協力して学生の愛情卒煙外来、また顎顔面神経疾患を鍼で治療する歯科東洋医学外来、口腔顎顔面診療科などの新設、顎顔面外科、インプラント、顎顔面補綴の融合など数々の斬新な発想でニーズに応えております。こうした医療環境の中でこそ、患者さんの理解が得られて診療参加型臨床実習、あるいは充実した卒後研修が可能となるのです。病院のご紹介は病院長が担当しておりますので、是非ご覧になってください。

○ 研究開発

大学院は昭和 52 年に開設され、昨年までに 558 名の歯学博士の称号を授与しました。昨今医学部、歯学部における若者の大学院離れ、研究離れがしきりに云われていますが、本学歯学部

大学院生の数は 73 名で定員を少しオーバーしている程の盛況です。専攻分野は臨床が圧倒的ではありますが、基礎歯科医学を専攻する人も少しずつ数を増しております。文科省の科学研究費の昨年度の獲得総額は 89,190,000 円(直接経費)に達しております。その他わが国内外の外部資金導入も盛んに行われ、基礎と臨床が連携して活況に研究が行われております。勿論岡崎国立共同研究機構、放射線医学総合研究所、産業技術総合研究所など外部研究機関との提携による学際研究も盛んです。今までにも複数の専門領域にまたがる大型研究として、ハイテクリサーチセンター(1998)、バイオベンチャープロジェクト(2000)、学術フロンティア(2003)などのプロジェクトをそれぞれ立ち上げて大きな成果をあげています。来年度からは特別荣誉教授の称号の下に世界的に著名な研究者を招聘し、高い見地から本学研究陣に光を与えていただきたいと思います。お待ちしております。

○ 国際化

歯学の研究、教育、臨床すべての点においてグローバル化が進んでおり、日に日に加速されています。これからの歯科医師にはあらゆる意味で国際的な視野が常に必要になります。鶴見大学歯学部は古くよりこの点を先見して、まず中国北京市の首都医科大学口腔医院(1986)を皮切りに、韓国檀国大学校歯科大学(1987)と相次いで姉妹提携を結びました。その後は世界の優れた大学と学術交流校関係を樹立しており、メルボルン大学(オーストラリア)、タマサート大学(タイ)ロンドン大学クイーンメリーウェストフィールド校(英)ペラデニア大学(スリランカ)ベイラー大学(米)ベルン大学(スイス)香港大学(香港)です。これらの大学とは積極的に教員の交流、共同研究を展開しており、大きな成果をあげておりますが、檀国大学とは 1989 年より学生の交流も相互に行っておりました。昨年からは学生の国際交流の枠を大幅に広げ、檀国大学、メルボルン大学、ロンドン大学、ベイラー大学の 4 大学歯学部と相互交流を行い本学から計 27 名学生が海外で学術交流を行うことは画期的なことでした。短期間の交流でも学生達の目は輝き、世界の視野でものを見るようになったと実感しておりました。今後ますます多くの大学と交流を深めて参りたいと思っております。外国からのお客様は学生を含めて近代設備を備えた快適なゲストハウスでお迎えしています。

○ 学生生活

交通至便の地にありながら深い緑に囲まれ、禅宗の落ち着いた雰囲気の中で学生はのびのびと明るい生活を送っています。体育館や運動場も広々と用意されております。歯学部はスポーツを勧めており、運動部の活動は活気に溢れております。昨年は全日本歯科学学生総合体育大会にて、野球、陸上、サッカー、アメリカンフットボールの 4 部門の優勝を果たしました。いずれも体力の限界に挑戦するチームプレー部門で、激しいスポーツのなかで信頼と闘志が自然に育まれ、最高の人格形成が行われているはずで。

文化活動も大変盛んに行われています。芸術、学術、それに様々な趣味の同好は人間性を豊かにします。また学生のうちから専門の歯学あるいは自然科学に興味を持ち、専門の教員とともに

に知識を深めて、教員と共に眼を見張るような研究を成し遂げる学生も少なくありません。鶴見大学の専門学会である鶴見歯学会でも毎年学生の研究発表が必ずありますが、それだけでなくIADRにおける Hatton Award の日本代表者(2007年)あるいは2006年、2007年に続けてデンツプライの Student Clinician Program(SCP)の第3位を獲得することからも国際的にも通用する素晴らしい成績が得られていると云えます。

これらの充実したクラブ活動は全て文学部や短大の学生と一緒に共同作業をしているので単科大学にはない味わいがあり、その後の人生に必ず良い栄養になるものと思われます。

以上少し長めのメッセージを最後までお読みいただいた方々に感謝します。今後の鶴見大学歯学部の飛翔の軌跡を見守ってくだされば幸いです。

平成 20 年 1 月 1 日 歯学部長 瀬戸皖一